

全国大会報告

日本色彩学会第53回全国大会[名古屋]'22開催報告

Report on the 53rd Annual Meeting of the Color Science Association of Japan, Nagoya 2022

第53回全国大会[名古屋]'22実行委員会

日本色彩学会第53回全国大会[名古屋]'22は、2022年6月25日(土)、26日(日)の2日間、椋山女学園大学星が丘キャンパスで開催された。研究・作品発表66件、参加登録者数230名、2019年の大会以来、参加者が直接対面できる全国大会となった。蒸し暑い天候となったが、現地で開催するからこそ感じられる季節感とも言えよう。今大会のテーマは、現在の社会状況と久しぶりの現地開催の復活を象徴する『カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience』とした。残念ながら、飲食を伴う賑々しい交流会は見送らざるを得なかったものの、以前は当たり前のことであった「参加者が現地会場で空間を共有すること」の喜びをあらためて実感できたという点で、まさに“レジリエンス”の大会となった。また、次節以降の報告にあるように、今大会は現地とオンラインの両方を取り入れた本学会としては初めてのハイフレックス形式で行った。担当スタッフは何度もありハールを繰り返すなど種々の苦勞が伴ったが、今後主流となる可能性が高いこの形式での開催を経験したことは本学会関係者にとって貴重な機会となったと思われる。

本大会は、公益財団法人セコム科学技術振興財団による学術集会および科学技術振興事業助成、公益財団法人大幸財団による第39回学会等開催助成をいただきました。厚く感謝を申し上げます。

(実行委員長 羽成隆司)

◇研究・作品発表

長引く新型コロナウイルス感染拡大の影響で、ここ数年間は日本色彩学会においても通常の大会開催ができなかった(51回大会、52回大会はオンライン開催)。今年度第53回大会では、当初感染状況が比較的落ち着いていたこともあり、久々に対面形式で開催することを目指して準備に着手した。

しかしながら、2022年1月からの感染第6波による新規感染者の急増を受け、全面的なオンライン開催移

行も視野に入れつつも、対面による会員間の研究交流の活性化という当初の企図を少しでも実現すべく、対面とオンラインのハイフレックス開催を主軸とする準備方針に転換した。幸いにもその後状況が緩和し、無事ハイフレックス開催を実施することができた。

ハイフレックス方式での開催への転換に伴い、口頭とポスターの2種の発表形式を設定し、演題募集をすでに開始していたが、ハイフレックスでのポスター発表は実施困難であるとの判断により、急遽発表全件を口頭発表で行うこととした。若干の混乱がありつつも、例年に比較して遜色のない70件の発表申し込みがあり、最終的には66件の研究発表が実施された。

全件口頭発表ということで、開催時間に制約のある中、セッションの割り振りには困難があったが、最終的には、大会2日間にわたりA、Bの2会場で合計14テーマの研究発表セッションが設定された(カラーデザイン、色彩文化[以上、6月25日A会場]、顔・表情、色弁別・金色感・光沢感[以上、25日B会場]、色彩情報、技術・測色、色覚の多様性、International-1、2[以上、26日A会場]、色彩教育、ファッション、嗜好・調和・恒常性、地域・建築・空間、色彩と感覚[以上、26日B会場])。各セッションには4～5件の研究発表が配置され、2つのInternationalセッションでは日本在留中の留学生及び海外(タイ)からの英語による研究発表がなされた。

いずれのセッションにおいても、しっかりと準備された発表と、それに続く熱心なディスカッションが展開された。ハイフレックス開催により、2会場の進捗に差が出てくることを危惧したが、座長の適切な差配により、大きな混乱なく研究発表を進めることができた。改めて記して謝意を示したい。

今回大会における研究発表を聴講していて特に印象深かったことは、学生の発表と質疑応答の質が以前に比して格段に向上していたことである。本人の努力と、指導教員の支援の成果であろう。このことは、全

国大会発表奨励賞の受賞者が計5名にも及んだことに端的に現れているように思われる。日本色彩学会の次世代を担う研究者が着実に育ちつつあることを、大いに心強く思った次第である。

最後に、研究発表に関して、今回大会から新たに取り組んだ事項を挙げておく。これまでの日本色彩学会誌が学会誌と論文誌とに分割され、それぞれ電子発行されることとなったことと連動し、全国大会における発表のアブストラクトと予稿は、大会参加者のみがアクセス可能な全国大会特設サイトに掲載した(アブストラクトは事後に学会誌『色彩学』Vol.1 No.2に掲載された)。また、昨今の社会的情勢を鑑み、提出された予稿原稿に対し、事前に著作権侵害等の確認を行い、必要に応じ予稿原稿の修正を求めた。大会当日の発表資料(スライド)に関しても、発表時の混乱を避けるためにWebを経由して事前に提出いただいた。いずれも事前の告知が十分にできておらず、発表者各位にご迷惑をおかけしたが、何卒ご了承賜りたい。各位のご協力により、Withコロナにおける新たな全国大会の形をしめすことができたのではないかと自負している。

(発表担当：原田昌幸・中村信次・
深井英和・小濱朋子)

◇招待講演・特別学術講演

招待講演では、三鷹の森ジブリ美術館の学芸員の伊藤望氏に「アニメーションの色彩 ～スタジオジブリ作品を彩った保田道世氏について～」と題したお話をいただいた。中日新聞社のご尽力もあり、2022年11月から愛・地球記念公園内(愛知県長久手市)に「ジブリパーク」が開園するこの時期に合わせて、念願のス

タジオジブリ関係者による講演が実現した。

アニメーションの世界における“色”は、登場人物の印象を決めるだけでなく、実写映画や演劇における衣装や照明の役割も担い、時間帯、季節、空間、立体、位置、素材、人物の心理をも表現する。このように、“色”が役割を広げていったのは80年代以降のことである。日本でアニメーション制作が本格化した当初は、多くの場合、晴天の昼間でも、夜の屋内でも、キャラクターには同じ色が塗られていたのだそう。その草分け的な存在、保田道世氏が、男女によって待遇差がある時代背景を切り抜け、スタジオジブリ作品の色彩設計という職種でいかに活躍し、今のスタジオジブリ作品の世界の構築に役割を果たしてきたか、実際のアニメーションから切り出した沢山の画像を用いて具体的に説明された。色彩表現の種明かしを見せていただいているような、とても贅沢な時間で、普段から慣れ親しんでいるジブリアニメーションの情景描写を見る目も変わりそう。ぜひもう一度、ジブリ作品をじっくりと見たいと思った聴講者も多くいたことだろう。

保田氏は「色彩設計は教えられる。教えるのは難しい。」「とにかく、ものを見ることに始まる。それをたくさん自分の中に貯えなくちゃ、色彩設計はできない。」「と言っていたと紹介された。このメッセージ、私たちもしっかりと受け止めたい。

特別学術講演では、東海支部会員のご縁により、浜松医科大学医学部の針山孝彦教授をお迎えし、「蟲(生き物)が観る世界を学び持続性社会を実現する蟲瞰学の創成」についてお話しいただいた。バイオミメティクスの研究の重要性から、生きたまま・濡れたままで観察できるNanoSuit法を見出し、物事を俯瞰する『鳥



図1 招待講演 伊藤望氏

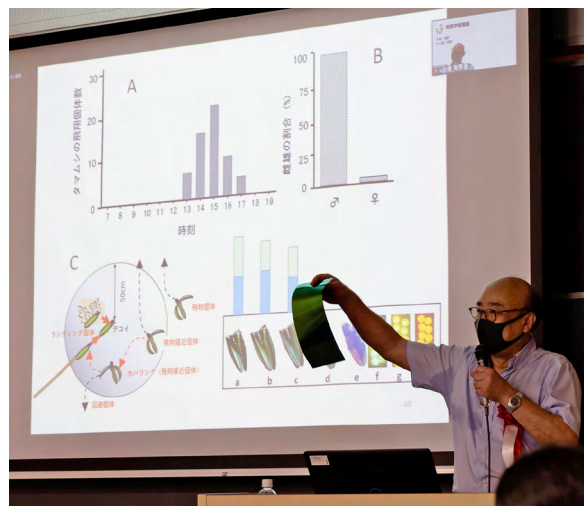


図2 特別学術講演 針山孝彦氏

瞰』という言葉に倣って『蟲瞰』と表した『蟲瞰学』を創設するに至った経緯を、丁寧に分かりやすく紹介していただいた。「顕在空間」における観測データに潜む本質的な情報を、情報学の「潜在空間」から抽出し、情報の階層性や重み付けなどを明らかにすることで「見えない世界を可視化する」というスケールの大きな世界観に圧倒されつつも、人類の尺度で環境を理解するだけでなく、生きとし生けるもの達それぞれが持つ情報世界（環世界）を理解し、蟲の尺度とともに生態系のバランスを保つ技術確立がいかにかに必要か、改めて考えさせられた。膨大な研究の1つ1つを愛おしそうにお話しされる先生から、研究に対する真摯な姿勢の大切さを教えられ、私たちに大きなエネルギーをいただいたような気がする。

大会アンケートの結果（回答数：88名）によると、招待講演には8割、特別学術講演には7割の方に参加いただき、参加した方からは、両講演とも100%に近い好意的評価をいただいた。講演の内容が充実していたことはもちろんであるが、双方の講演者が昼食時に話を交わし、お互いの分野に興味をもち、意識して話を進めていただいたことで、講演会全体が意義深いものになったと感じている。今回の講演者のお二人には、改めて感謝の意を表したい。

（特別企画担当：小濱朋子・松本和二）

◇特設サイト

全国大会の予稿集が以前の重たく分厚い冊子から電子版に移行してから久しいが、本全国大会においても大会参加者向けの案内や予稿集の配布を参加者限定の特設ウェブサイトで行うこととなった。

特設サイトは参加者限定のパスワード付きとした。本大会は学会初のハイフレックス開催であり、遠隔から参加する人や大会会場で現地参加する人など、参加形態は様々であるため、特設サイトはPC、スマートフォン、タブレットなど、各種デバイスに対応できるよう、Bootstrap (WebアプリケーションのためのフロントエンドUIフレームワーク) を用いたレスポンシブデザインで構築した。これにより、異なる画面サイズに対しても表示レイアウトを動的に対応することができた。

サイトのコンテンツは「ホーム」「タイムスケジュール」「アブストラクト&予稿集」「受付グッズ&星ヶ丘情報」「遠隔参加の方へ (Zoom リンク)」「現地参加の方へ」「発表者の方へ」「座長の方へ」の計8ページの構



PCで閲覧した場合

スマホで閲覧した場合

図3 閲覧画面

成とした。特に本大会は色彩学会初のハイフレックス形式での開催ということで、トラブルが起きないようにハイフレックスチームで議論を重ね、各形態の参加者 (Zoom 遠隔参加、現地参加、発表者、座長) それぞれへの案内を特設サイト内で細かく指定した。また、参加者には星ヶ丘という魅力的な開催地を十分に楽しんで頂けるよう、星ヶ丘在住の実行委員による充実した町の紹介をおこなった。

参加の形態や使用デジタル機器の多様化が進むなか、参加者が常にアクセスして参照する大会のフロントエンドとして、今後もフレキシブルで見やすい大会特設サイトの重要性はますます高まると思われる。

（特設サイト担当：深井英和・川澄未来子・加藤千穂・渡邊千穂）

◇ハイフレックス対応

現地参加とオンライン参加を同時に実現するハイフレックス方式の開催は、日本色彩学会の大会として初めてで、運営側も多くの試行錯誤があった。準備のポイントと事後に気づいた反省をまとめる。次回以降の運営の参考していただきたい。今回ハイフレックス対応を担当したのは、実行委員4名と技術スタッフ4名 (名城大学理工学部情報工学科4年生) である。

【厳しい前提条件】

A. 現地/遠隔参加は当日まで個人の自由

ハイフレックス開催の便利さの一つが、聴講者・発

表者とも参加形態を自由に決められる点である。初日に現地参加、2日目にZoom参加なども可能で、急にコロナ濃厚接触や体調不良になっても自宅からの参加に切り替えられる。しかし当日まで人数が定まらないのは、運営側にとって悩ましく、会場の感染防止対策、ネームホルダー準備、発表者への案内などあらゆる準備に影響する。

B. 会場がハイフレックス未対応の一般教室

相山女学園大学の会場は、集音指向性の強いハンドマイク3本（音量調整チャンネルは1つ）と天井スピーカが設置された一般講義室である。追加で準備したデバイスは、ノイズ除去やエコー防止機能のついた会議用マイクスピーカ（YAMAHA YVC-1000）、自動フォーカス付画角90°のWEBカメラ（Logicool C930s）である。厳しい環境条件に機材を組み合わせ、ハイフレックス環境の構築に挑んだ。

C. タイトで余裕のない発表スケジュール

現地開催のポスターセッションをオンライン配信するのは難易度が高いため、全て口頭セッションになり、タイムテーブルに発表が隙間なく詰め込まれた。セッション直前の発表者点呼は10分間で、しわ寄せ吸収の余裕時間もない。①現地／遠隔地が混在の発表者点呼、②会場PC上のスライド挙動テスト（現地発表者）、③Zoom音声・画面共有テスト（遠隔発表者）、の3点を10分で終える必要があり、座長も現地／遠隔地にまたがり、複雑を極めた。

【準備ポイントと事後の反省】

1. 登録者の参加形態の把握

200人規模のハイフレックス開催の難点は、現地／遠隔参加の人数比が直前まで読みにくいことである。そのためGoogleフォームで参加調査を繰り返しながら準備した。

- ・1ヶ月前：参加登録者の現地／遠隔参加の意思を把握
- ・1週間前：聴講者の日毎の現地／遠隔地の数を把握
- ・1週間前：発表者と座長の現地／遠隔地の数を把握

これを参考に、会場質疑時のカメラやマイク準備、受付グッズ数、発表ファイルや接続チェックなどを検討した。

2. 開催前の接続テストと発表スライド管理

開催直前の週にZoomによる事前テスト機会を5回

設けたところ、発表者66名中47名が希望した。現地発表に動的コンテンツなどが含まれる場合は、会場PCをZoomに繋いで本人に挙動確認してもらった。タイや中国の参加者も事前確認機会を作ったため、当日の発表を安定化させる効果があった。Zoomに不慣れな発表者も事前に把握できた。

遠隔発表より現地発表の方が若干多かった。現地発表者の全スライドファイルを事前に回収し、会場PCに保存しておくことで画面共有についてのトラブルなく乗り切ることができた。

3. ハイフレックス機材の設定

各会場に設置したPCは5台（Zoomホスト用・発表者用・座長用・タイマー／ベル用・モニタリング用）である。ハウリング防止のため会場内でのZoom接続はこの5台だけとした。発表者の個人PCを教卓で接続し直す時間と技術の余裕がなかったため、招待講演者を含めて全員が会場PCを使ってプレゼンした。ハンドマイク・マイクスピーカ・会場カメラ・会場スクリーンの接続、Zoomのマイク・ビデオON/OFF設定を細かく決めて管理した（図4）。一つでも設定ミスするとたちまちハウリングを引き起こすため、当日も神経を使った。

Zoom上でのタイマー表示とベル鳴らしは、既に多くの学会で実績のある方法（ストリーミング配信ツールOBS Studio、タイムキーパーアプリTime Keeper、仮想オーディオデバイスVB-CableをZoomに連携）を用いた。

進行中は会場内でオンライン参加者と同様に実行委員1名がイヤホンで聴講をし、映像や音声の不具合があった際にすぐに連絡をし、迅速なトラブル対応ができるようにした。

4. Zoomの音声・映像の管理

会場の音声をクリアに拾うのに最後まで苦労した。ハンドマイクは持ち方（角度）や距離による集音指向性が強く、例えばジブリの長い講演においてゲストスピーカがハンドマイクを利き手から左手に持ち替えるたびに、音が拾えなくなった。会場参加者は気になったと思うが、オンライン参加者には聴き取りにくかったはずだ。また、複数のハンドマイクの音量調整チャンネルが1つしかなかったため、声のハッキリした人とハッキリしない人など話者に差がある2名の質疑応答（対話）は、会場では聴こえても、オンライン参

加側には片方が聴こえにくくなったと思う。

途中入室の人にも進行中のセッションがわかるように、発表者や座長のバーチャル背景にセッション名や時間帯を表示した。しかし、ジェスチャーなどの動きが多い場合、会場PCのインカムでは発表者の顔がバーチャル背景に埋もれて映らない場合があった。

このあたりは、発表者・講演者の個性や癖に依存することであり、予め想定しにくいことである。

5. セッション進行の管理

発表審査があるため、2会場の進行を遅れなく定期通りに進めるよう理事会から要請があった。進行を同期させるため、ハイフレックス対応チームでLINEを使って毎発表の開始時間を会場間で連絡し合った。途中でホストPCの接続が不安定になり、一時遅れが生じたが、それぞれの会場内でしわ寄せを吸収し全体スケジュールに影響が出ないようにした。セッション前の点呼に間に合わない発表者はいたが、奇跡的に発表に1件も穴を開けずに終わることができた。

6. 発表者と参加者へのインストラクション

参加者への注意事項は、現地/遠隔参加、聴講者/発表者/座長によって異なるため、特設サイトに掲載するインストラクション作成に苦勞した。開催を経験して気づいたアナウンス不足の反省が2点ある。

(1) オンライン参加者はイヤホンを着用すること

音量が十分でない声は、PCのスピーカ出力では聴き取りにくい、イヤホンを使うと格段に聴き取り

やすくなる。完全オンライン開催のイベントはPCスピーカ出力で問題ないが、ハイフレックス開催は会場側の音量が安定しないため、イヤホンの着用を推奨すべきだった。チャットで「質問が聞こえません」などのメッセージが時々あった。

(2) オンライン参加者自身で画面割りを調整すること

Zoom WebinarではなくZoom Meetingの場合、視聴者は自分で画面分割を設定しながら視聴する必要がある。今回はカメラ映像が4画面あり(発表者の顔・座長の顔・会場全体・タイマー)、視聴側で最大画面を切り替えながら見ていただきたかったが、チャットで「座長の顔しか見えません」「タイマーがじゃまです」などのメッセージが時々あり、説明対応に追われた。

全体を通じて、苦勞はしたが大過なく乗り切れた印象をもった。現地開催は、顔を合わせて研究者たちが交流できることが大きな価値であるが、一方オンライン開催は、身体的事情や家庭的事情などで参加が難しい人、移動時間がとれない人にとっても参加機会を生み出せる。ハイフレックス開催には、まだまだ多くの関係者と参加者の理解と協力が必要であるが、運営ノウハウと経験が蓄積されれば、全国大会をハイフレックス方式で開催するのは理想的だと感じた。施設や機材の技術的な進展にも助けられ、今後徐々に開催クオリティが上がっていくことに期待したい。

なお、今回購入した機材は今後も様々な学会活動に活用いただけることとなっている。

(ハイフレックス対応担当：川澄未来子・加藤千穂・深井英和・渡邊千穂)

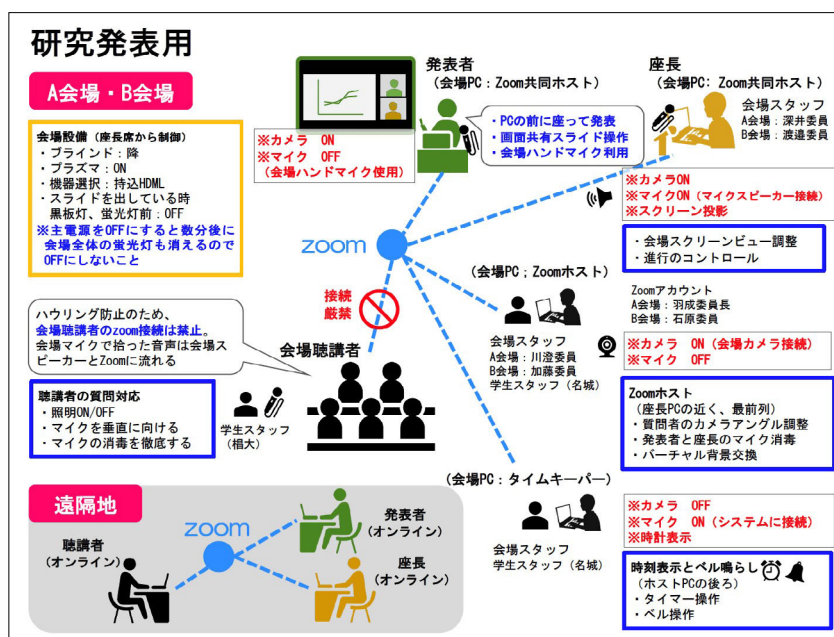


図4 会場PCと各デバイスの接続と設定

◇広報活動と大会ビジュアル

今大会の広報は、コロナ感染状況と社会情勢を見極めながら大会運営する実行委員会に合わせて、情報を正確に迅速に周知することが重要であった。広報チームの取り組みを時系列でお伝える。

2021年11月、2年半ぶりの現地開催を目指し、大会テーマは“カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience”に決まった¹⁾。広報チームの最初の仕事は、大会メインビジュアルの制作であった。デザインは東海支部会員の渡辺真由子氏（ジュエリーデザイナー）に依頼し、互いに連携しながら仕上げた²⁾。

12～2月、大勢の発表者を誘致するため、大会オフィシャルサイトとメールニュースを用いた定期的な案内をスタートさせた。当初は現地開催のみを予定していたが、2月のオミクロン株の猛威を鑑み、遠隔地からのオンライン発表も受け入れることを実行委員会が決めた。このアナウンスが発表申込の増加に直結した。

4～5月は、聴講者も現地参加とオンライン参加が自由に選べるハイフレックス開催になったことを強調しつつ、参加登録者を増やす努力をした。現地参加と遠隔参加の人数比が運営側の準備に影響を与えるため、参加登録フォームの中で参加形態の希望を収集した。

5～6月は、週1回のペースでメールニュースを発信し続けた。現地に足を運んでいただくために、現地参加の安全性をアピールし、会場で配布する安全アメニティ（不織布マスクや除菌ウェットなど）の準備を始めた。

開催当日は、大会メインビジュアル第3弾に描かれた空を再現するかのような見事な晴天となった。会場には3種類のポスターを10セット貼って、参加者を出迎えた（図5）。ポスター前にて笑顔で記念撮影される参加者の姿をみて、現地開催の再開を改めて実感した。受付では、不織布マスクと除菌ウェットシートが入った、大会ロゴ入りポーチを配布した（図6）。発表会場では、ロゴ入りマスクをしてくださっている方々を数多く見かけた。参加登録者の半数以上が現地参加となり、用意した150セットはほぼなくなった。オンライン参加された方からも希望が出るほど人気で、制作した甲斐があった。また、熱中症予防のための水のペットボトルと地元の小菓子が受付に置き、自由にとっていただいた。名古屋は40度近い真夏日となり、駅から長い坂を登って辿り着いた後に手にする水ボトルは、参加者に好評だった。また、小菓子（1日目：障

図5 大会メインビジュアル²⁾図6 受付グッズ（安全アメニティ）³⁾

がい者が作るカラフルな久遠チョコレート、2日目：芋花恋のハンドメイドお芋クッキー）も、聴講に長時間集中する中で、ホッと一息つけるおやつになったと感想をいただいた。

会場キャンパス内には、昼食を提供する学食や売店がなかったため、現地参加者には近隣飲食店での外食かテイクアウトによる持ち込みをお願いした。大会特設サイト内にランチマップ、テイクアウト情報、名古屋のお土産情報などを掲載し、ご不便をかけずに参加を楽しめるように工夫した。

2年半ぶりに対面の再会を果たした方々が非常に多く、大きな歓声や談笑する姿があちらこちらで見られた。広報チームが準備した情報や物品が、参加者の皆様の安心や高揚や癒しに繋がり、そして研究者間の交流に役立ってくれたことを感じ、心から嬉しく思う。

- 1) 羽成隆司：巻頭言「色彩によるレジリエンス」、色彩学, Vol.1, No.2, p.65 (2022)
- 2) 渡辺真由子, 川澄未来子, 祖父江由美子, ながなわ久子, 林英光：第53回全国大会 [名古屋] '22のビジュアルデザイン, 色彩学 発表論文アブストラクト, Vol.1, No.2, p.80 (2022)

3) 日本色彩学会第53回全国大会[名古屋]'22のお知らせ(第7報)(最終閲覧日:2022年7月18日)
<https://www.color-science.jp/zenkoku2022/index.html#kaisaiannai7>

(広報担当:川澄未来子・祖父江由美子・
 ながなわ久子)

◇総会・式典

大会初日の朝一番で通常総会が開催された。他のプログラム同様ハイフレックス形式で行われたが、次々と入れ替わる発言者への対応、議決権をもつ代議員と一般参加者の区別、議決数の確認など、研究発表以上に煩雑な対応が求められるため、ハイフレックスチームの協力のもと事前に十分なシミュレーションをした上で臨んだ。その甲斐あってつつがなく議事進行し、令和3年度決算はじめすべての議案が可決成立し、予定時間内に無事終了した。

二日目の最後には、同じくハイフレックス形式で式典が挙行された。まず、芦澤昌子氏、中塚木代春氏、稲垣卓造氏の三氏に名誉会員証が授与され、芦澤氏からオンラインでご挨拶を頂戴した。つづいて久下靖征氏に第26回色彩学会賞が授与され、久下氏からのビデオメッセージが披露された。長年の功績が評価されたことへの御礼と、本会の益々の発展を願うお言葉が述べられた。つぎに、東吉彦氏と下川美知瑠氏に活動功労賞が、岡嶋克典氏と溝上陽子氏に査読功労賞がそれぞれ授与された。東氏からはオンラインで、他の三氏からは会場でご挨拶をいただいた。さらに、論文賞受賞論文(題目:Color appearance of small stimuli presented in central and near peripheral visual fields. 著者:Shuichi Mogi, Masato Sakurai, Tomoharu Ishikawa, Miyoshi Ayama 掲載誌:Color Research and Application, Vol.46, No.4, 2021, pp.722 ~ 739)の著者全員が表彰され、代表して茂木修一氏からご挨拶をいただいた。また、研究奨励賞受賞論文(題目:砂利の乾燥過程における濡れ色・濡れ光沢の測定 著者:磯見麻衣・酒井英樹 掲載誌:日本色彩学会誌, 第45巻, 第2号, 2021, pp.55 ~ 62)の第一著者・磯見氏が表彰され、ご挨拶をいただいた。

つづいて、本大会の発表奨励賞が表彰された。エントリー発表15件の中から、以下の5件の発表が荣誉に輝いた(敬称略)。「色弁別の知覚学習がカテゴリカル色知覚を変化させる」堀内涼葉(東京工業大学)、「視覚特性の個人差を考慮したipRGCが色弁別に与える影響の考察」大津昌也(千葉大学)、「サブ画素配列の

ディスプレイ MTF が知覚的解像度に与える影響の検証」安渡翼(千葉大学)、「間接陽極酸化によるニオブのカラーリング技術:単色からオイルスリック模様まで」國母優香(工学院大学)、「『Hidden Plate』の特性を組み込む画像変換アプリケーションの制作と検証」濱崎光(九州大学)。各受賞者からオンラインまたは会場にてご挨拶をいただいたが、中には帰途の新幹線車中からオンラインでお顔を見せてくれた受賞者もあり(さすがに音声はなかった)、時代の変化を痛感させられた。

その後、令和4年度研究会大会の案内が色覚研究会主査で実行委員長の溝上陽子氏から、さらに東京造形大学での開催が直前に内定した令和5年度全国大会の概要告知が実行委員長の栗野由美氏からなされた後、本大会実行委員長の羽成隆司氏による閉会の挨拶で締められた。羽成氏からは、実行委員の献身的努力に対する御礼、天候に恵まれた(恵まれすぎた?)ことへの感謝、そして3年ぶりの(部分的)対面開催が成功裏に終わったことへの安堵の気持ちが述べられた。

(本部リエゾン担当:高橋晋也)



図7 総会冒頭挨拶を述べる篠田会長



図8 式典の最後に挨拶する羽成実行委員長